

# 道徳

教えて！加藤先生

教えて！土田先生



千葉大学教育学部教授  
土田 雄一

「小学道徳 ゆたかな心」(光文書院)編集委員



筑波大学附属小学校教諭  
加藤 宣行

「小学道徳 ゆたかな心」(光文書院)監修者

子どもの成長を助ける  
評価 (▶P.18・19)



「考える道徳」の道徳の  
評価とは？ (▶P.20・21)

道徳科がスタートして、「評価」に関する悩みや不安を感じている方は少なくありません。しかし、大切なのは「通知表に記述する評価」ではありません。評価は本来、子どもの成長を認め、励まし伸ばすためのものです。指導要録等の記述のように「大きくりのまとまりでの評価」(総括的評価)も必要ですが、「1時間ごとの関わりによる評価」(形成的評価)こそ、大切にしてほしい評価です。それは、発言への頷きであり、問い返しであり、道徳ノートやワークシート等へのコメントです。

また、道徳の時間は「自分の生き方を考える時間」ですので、「自己評価」も大切。「大きくり」(一定の期間)で振り返るためには、手がかりが必要です。それが、道徳ノートやワークシート等であり、板書の写真等の記録です。同時に教師は子どもたちの変容を見取り、フィードバックしていくことが大切です。

子どもたちの学びや成長に関わるのが子どもへの評価であり、それらを通して自分の授業を改善することが教師の授業評価なのです。

「深く考える道徳」が標ぼうされ、その授業に関する評価が求められています。ですから当然、まずは子どもたちに深く考えさせる授業をする必要があります。それは、はじめから分かったつもりで思考が止まりがちな場面や、今まで考えもしなかったような問題に向き合わせ、思考回路をフル回転させるような授業です。

そうした授業では、子どもたちが本気になって考え、友だち同士の意見交流も糧にしなが、気づきや問題意識を深めていきます。それがあってこそ、授業の中での変容や、学びの深まりを実感することができます。

評価はそこからです。そうでなければ、一人ひとりの変容を具体的に見取ることはできないでしょう。つまり、子ども一人ひとりを認め励まし、伸ばす評価をするためには、それに見合う授業をすることが不可欠だといえます。だからこそ、授業と評価は表裏一体なのです。